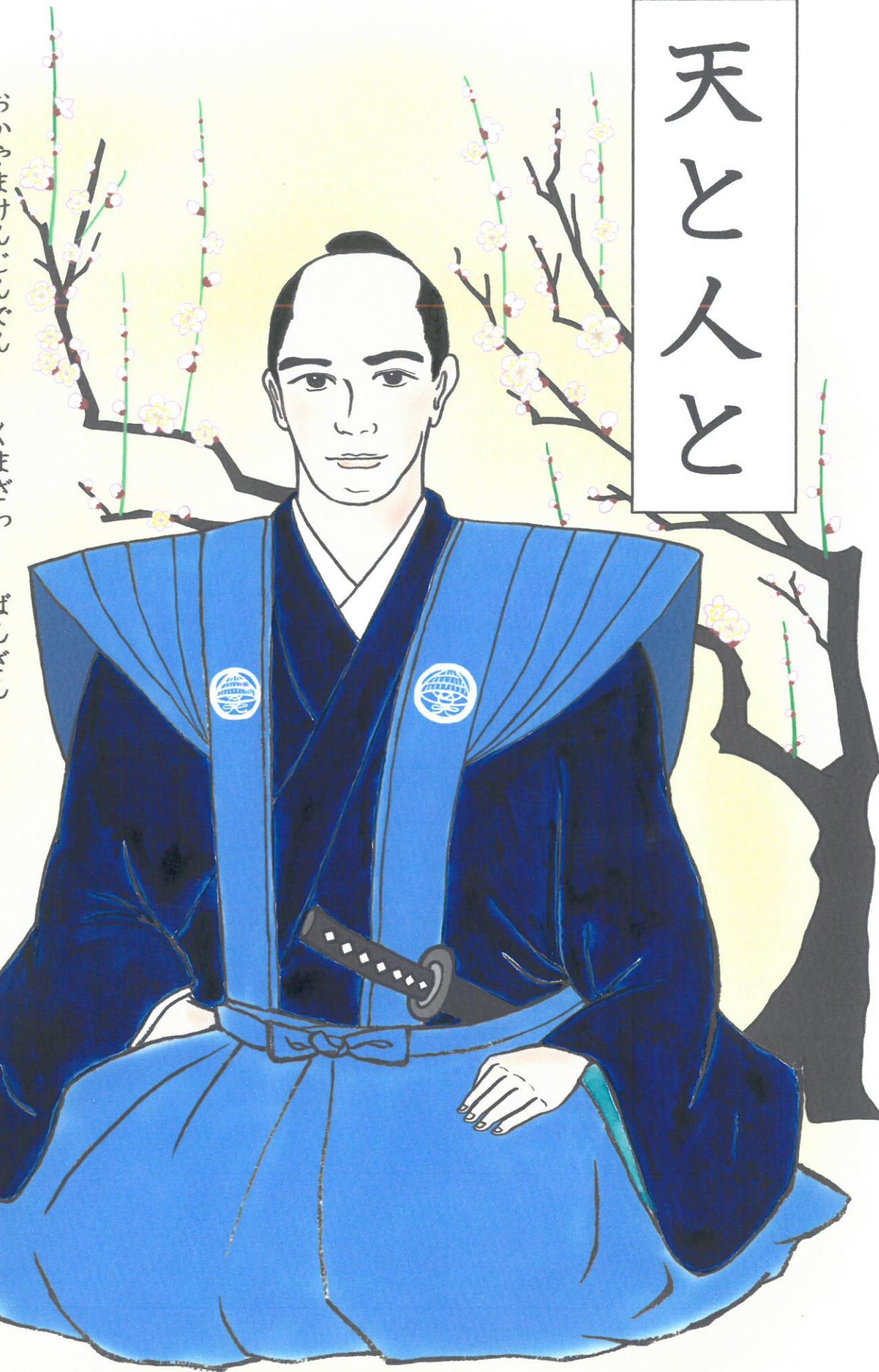


天と人と



岡山賢人伝 熊沢藩 山の物語

おかやまけんじんでん

くまざわ

ばんざん

山谷和子

今から約四百年前（一六一九年）、
やく

江戸時代とよばれた時代、
えどじだい

岡山のハマツシテ二カセ

つくした人が生まれました。

くまさわばんざん がくしや
熊沢蕃山という学者です。

学びのよみ

行動することの大切さ。

それらを多くの人に伝えた

蕃山先生の一生を、

ともに見てゆきましょう。



熊沢藩山は子どものころの

名を、佐七郎さしちろうといいました。

八才から、水戸みと いばらきけん（今の茨城県）の

母方かたのおじいさんの家でくら

します。

さむらいの家の子として

藩山は、高い志こころざしをもち、

おじいさんから武士ぶしとしての

心がまえやふるまいを学び、

しんの強い子に育ちました。そだ

じっくりと考え、それを成

しとげてゆく力は、この少年

のころ、はぐくまれたのでし

よう。

水戸みとの家



左七郎さしちろう
という名の、こ

藩山のかしこさは、

ぬきん出たものでした。

十六才の時、さるお方かたの
すすめで、岡山藩はんにおつかえ
することになります。

そして殿とのさま池田光政公いけだみつまさこうの
おそば近くにつかえるという
大事だいじな役目やくめをいただきまし
た。



それから三年。光政公の

おともで江戸のお屋しきに

えど

いたころ、遠い九州で大き

きゅうしゅう

な乱（戦い）がおきました。

らん
たたか

幕府（お国のこと）から光政公に

ばくふ

も、乱をおさめる手助けに行

てだす

くよう命令が出て、光政公は
すぐそちらに向かいました。

めいれい
む

藩山は殿をお守りしたく、

自分もおともさせてほしいと

藩にたのみますが、まだ前髪

のある少年であるため、ゆる

しをいただけません。

※藩…とのさまがおさめる土地。また、そのとのさまを中心とする、家来のあつまり。



藩山は、自分を岡山藩にみ
ちびいてくれた恩人も命を
おとし、父も傷をおつたと聞
き、いても立つてもいられず、
ひそかに前髪まえがみを切り落きりおちとしま
した。そしてこつそり江戸えどを
ぬけ出し、あとを追いました。

藩山には藩はんから、きびしい

おしかりがありました。

やがて乱らんもおさまり、むな

しさをおぼえた藩山は、自ら

藩はんを退しりぞくこととし、父方みづかたのお

ばあさんの家がある近江おうみ（今の

滋賀県しがけん）に身をよせました。

※退しりぞ（しりぞ）く…仕事からはなれ、やめること。



蕃山は自分をきたえるため

今こそ学問がくもんをしたいと思いま

した。ところが病氣びょうきにかかり、

一年間も家で一人で本を読む

日が続つづきます。よい先生と

出会いたい。心から、そうねが

つていた時、湖みずうみの向こうの

村に、儒教じゅきょうという学問をきわ

めておられる中江藤樹なかえとうじゆという

先生がいると知りました。

そこで何度も先生を訪ね、

頼みこみ、やつと弟子として

いただき、先生の塾じゅくで学ばせ

てもらうようにしたのです。



先生との出会いは、藩山に

とつて何よりの喜びでした。

ゆるしなく江戸を出たこと、

岡山藩を自ら退いたこと、
しりぞ

病氣で二年間も先生につけな

かつたこと。あせるばかりで、

心よわが弱っていたのを、先生の
教えはうるおしました。それ

は藩山のこれまでの生き方を

みとめてくれるものでした。

「人生の目的は、どうしたら
もくてき

得するかではない。正直で
とく
じょうじき

あることだ。まつすぐな心、そ

れがあなたの正義なのだよ。」
せいぎ



「人には本来、良いものがそなわっている。勉強するこ^{ほんらい よ}とによつて、その良いものが

本物^{ほんもの}となる。」

「学んだことを本物とするためには、行動^{こうどう}しなくては。」

人には生まれながらに善意^{ぜんい}

(よい心)がそなえられており、そ

れにしたがつた自然なふるまいや、天をうやまうことが大切であると、中江藤樹は蕃山

に教えました。これら陽明学

や儒教の基本を、蕃山は先生

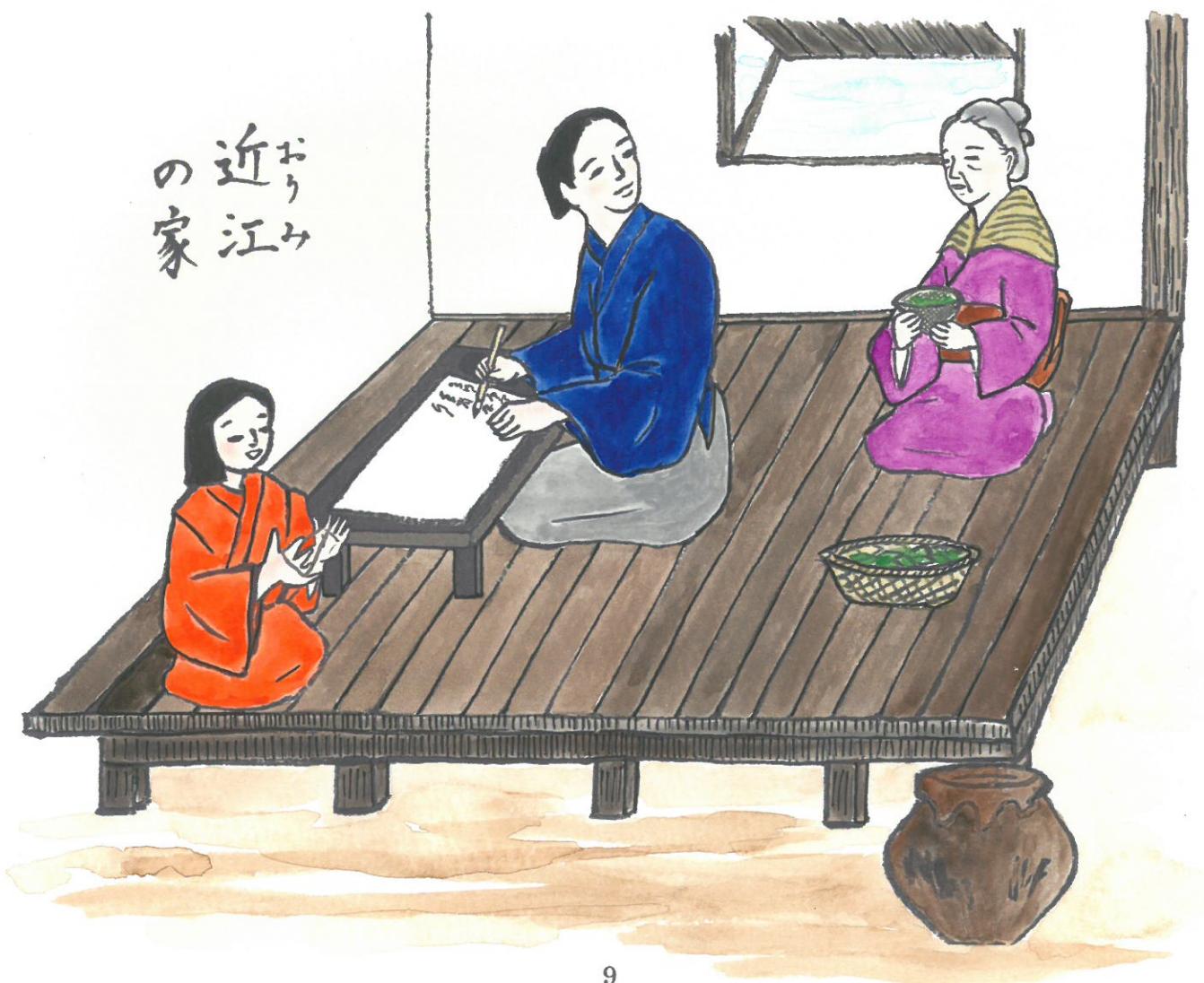
のもとで熱心^{ねっしん}に学びました。



八か月後、蕃山は家にもどりますが、それから手紙を通して、先生の教えをうけます。中江藤樹にとつても蕃山は、ともに陽明学をきわめていく、大切な弟子となっていました。

こうして蕃山は藤樹と交流を持ちつつ、近江で七年間をすごします。それは老いた母や妹たちと毎日食べる物にもこまる、きびしい日々でしたが、学問にはいつそう

の「みがき」がかかりました。



蕃山が学んだ陽明学は、

「心学」、心の学問と言われます。人としてどのようにあるべきか、そして行動すべきか。

蕃山は毎日儒教の本を読んで考えました。

「武士としてあるべき姿を、どのように考えますか」という質問に、蕃山は「人を愛することです」と答えています。

「民は米や野菜を作る。女の人は家で布を織る。武士は人を愛することで世につくす。」

蕃山はその通りの人でした。



人を愛する
愛とは
思いやり

また蕃山は、書物から学び、

こうも言っています。

「日・月・星の動き」が春夏

秋冬を生み出し、「暑い・寒い」

の気が、雨・風・雪・氷を生

み出し、「土、水、火」が、米

や野菜、草や木を生み出す。

天と地による生成(せいせい)（ものが生まれる

ことは、とどまるところを知り

ません。それは時に突つ走る

ことも不足なこともあるけれ

ども、天地の作用(さようこう)を人がおぎ

なつて調節(ちょうせつ)することで、この

世は安定すると言うのです。



だから、山や川を、人間の
都合だけで手を加えてはなら
ないのでした。木を切つたら、
その地に合つた種類の木を、
また植える。川をせきとめた
り、向きを変えたりする時は、
地形に合つた方法を考える。
洪水・水不足は地形をよく見
て、自然の側に立つて考える
ことで、ふせぐことができる。
「天地と人が一体になること
で豊かなめぐみが保たれる」
という考えは、蕃山が儒教の
本から学んだことでした。



おうみ

またこの近江で、蕃山は村のくらしを、まぢかで見ることができました。

近江では昔から、さむらいと農民の結びつきが強く、みなで協力して、自分たちの住む土地を守っていました。大雨に泣き、夏の日でりに苦しめ、米の不作をなげき、年貢の重さにうめく村の生活。それを乗りこえるには、さむらいと農民が、互いに知恵を出し合つて協力するのが大切なのだと蕃山は知りました。



やがて、近江に来て七年目、

藩山は岡山によびもどされ、

ふたたび池田光政公につかえ

ることになりました。

藩山二十七才のことです。

光政公はおどろきました。

かつて少年だった藩山は、

十年ぶりに会った今、学者と

して、りっぱな風格をそなえ

ていました。

光政公は藩山を高い地位に

きも

ちい

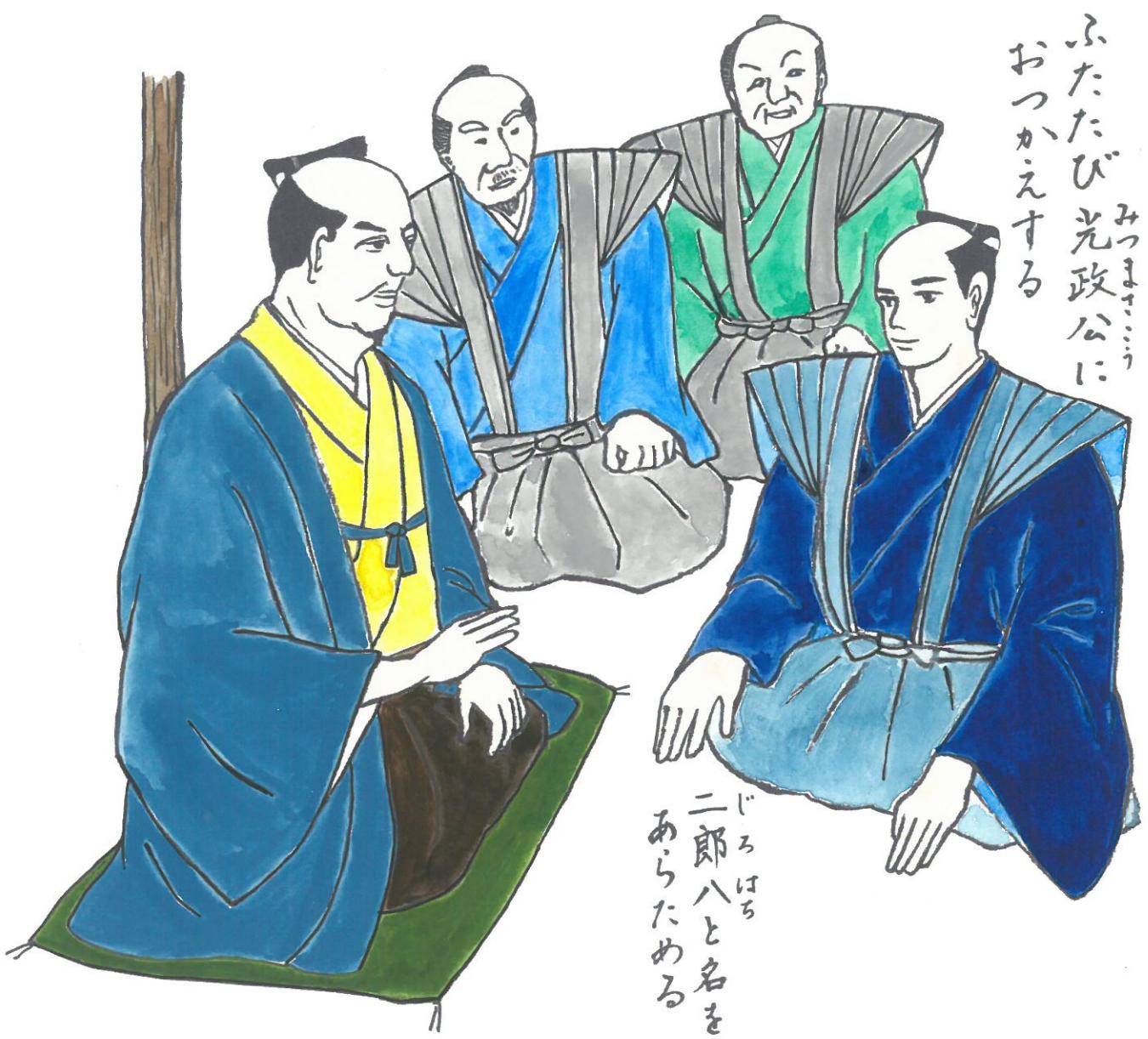
つけました。その気持ちにこ
たえようと、藩山も心をこめ

やくめ

て、お役目に当りました。

ふたたび光政公に
おつかえする

二郎八と名を
あらためる



藩山に人々が聞きました。

「先生、国をゆたかにするためには、山の木を切り、もつと田んぼを広げ、米を作るべきでしようか。」

藩山はこたえました。

「いえいえ、むやみに山の木を切ってはなりません。

木を切ると根っこがなくなります。土がやわらかくなると、

山の土は川に流れこみます。

そうして川ぞこが土砂で高く

なると、大雨の時、水があふれ、

洪水がおこるのです。



木や草がゆたかな山こそ、

田畠を洪水から守るのです。」

たはた

こうずい

まも

雨の日も、日でりのときも

山をととのえ、川を見まもる

ことで、人々のおだやかな

くらしが保たれる。天と人と

がともにあゆむという「天人

合一」の考え方を、蕃山は実際

に行動にうつしました。

蕃山は、山や川や田んぼを

見てまわり、民の話に耳を

かたむけました。

たみ



しかしそれでも、ある年、

岡山をながれる大河「旭川」

だいこうずい

は、大洪水をおこしました。

多くの家がどろまじりの水

たはた

にながされ、田畠は水にしず

ききん

み、かつてない飢饉(食べ物がなく

なること)

が人々をおそいました。

蕃山は光政公にねがい出て、

しろ
こめぐら

城の米倉をひらかせてもら

い、ためておいた米をすべて

民に分けあたえるよう、動き

ました。



また、蕃山は思い切って、

もう一つ、ねがい出ました。

それは、光政公の奥方の母

ぎみ

しょうぐん

おくがた はは

君が江戸の将軍さまの姉で

ばくふ

あるのをたより、幕府(国)から

たいきん か

大金を借りうけるという、お

それ多いねがいでした。

けらい

こうしたことを探来が口に

するのは、ふつうならば考え

られません。しかし光政公は、

民をすくいたいという蕃山の

思いに心を打たれました。

そして、そのように動いて

くれたのです。



かんじんなのは旭川の
あさひがわ
手当でした。
てあて

大むかし、岡山城を作る時、
じょう
か

川の向きをむりやり変え、
む

岸に手を加えたことで、川の
きし
くわ

はばがせまくなり、たえず

洪水がおこっていました。
こうずい

水のゆたかな、うつくしい

旭川を、何とかして手当して
てあて

やらなくてはなりません。

人工 放水路百間川
ほうすいろ ひやっけんがわ



津田永忠が
だ ながただ
ほうせい

完成せざる

海

藩山は土地の人に話を聞い

て、ため池を作つたり、堤防
(土手)を作つたりと、水をあふ
れさせないようにしました。

が、もつと大きな計画も立

てました。人々で力をあわせ
て新たに川をほり、そこに水
をながすようにするのです。

この計画は、のちに津田永
忠という人が引きつぎ、完成
させました。

その百間川という人工川
は、今も旭川放水路として
世界に知られています。

計画する

考える

旭川

旭川の水を
わきにながへて
海へのがすのは
どうだろ？

また、藩山は、学校の先生に

もありました。

国をゆたかにするには、人

をそだてることが何より大切

だと考えた光政公は、城内に、

「さむらいには強さと思いや

りが大切だ」と教える、さむら

いの子のための学校を作つて

いました。藩山は光政公から

たのまれ、その学校の先生と

なつたのです。

なかえとうじゅ でし

光政公は中江藤樹の弟子た

ちも岡山によびよせたので、

学校は大変にぎわいました。

たいへん



ところが、こうした動きは幕府には目ざわりでした。よいと思ふことを行動にうつすようにすすめる陽明学は、幕府の学者が重んじる「家来は身のほどを知り、足りない所をひたすら学べ」という教えに合わなかつたのです。幕府は蕃山を注意しました。



城の中が二つにわれ、
しろ

いさかいがおこったことで、

藩山は心をきめました。

藩山は光政公に、城を去る
さ

おゆるしをいただきました。

自分が去ることでさわぎを
さ
おさめたいとねがう藩山を、
光政公はうけとめました。

すぐれた人物の引きぎわは、
じんぶつ ひ
いさぎよいものでした。



こうして藩山は、十二年間

すぐした岡山城を、あとにし

ました。

(人が自分のことをせめたて、

悪口を言おうとも、自分は

人のことをせめないようによ

う。自分は自分、人は人なの
だ。それでよい。

やつてきたことにまちがい
はないけれども、だれをうら
むこともするまい。これでよ
いのだ。)

藩山はただだまつて、

しろ さ
城を去りました。



蕃山が身をよせたのは、
み

谷川のながれる山深い寺口村

でした。

蕃山はこの村に「蕃山」とい
しげやま

う名を新しくつけました。
あたら

鳥のさえずりだけが聞こえ
るような、しづかな山。



「草がのびのびとはえ、自由
に枝をはり、木々がおいしげ
る深い山」という意味をもつ
「**蕃山**」。

自然と人がともに生きるよ
ろこびを名にこめようとした
のでしようか。蕃山は、それま
での名をすて、蕃山了介とい
う名前にあらためます。

村にも自分にも「**蕃山**」の名
をつけ、第二の人生がはじま
りました。



四年後、ふたたび岡山藩の

けらい

家来がさわぎはじめたので、

蕃山は京都にうつりました。

きょうと

こののち蕃山の住まいは、幕

かくち

府によつて各地に移されると

うになります。蕃山がいると

あつ

ころ、つねに人が集まり、教え

あつ

を聞きたがるのを、幕府はお

それました。

が、そんな中でも、蕃山と岡

とぎ

山とのきずなが途切れること

はありませんでした。蕃山の

「教育」という種まきが岡山

きょういく

たね

で芽を出していだのです。



光政公は藩山が去つてから

も教育の灯をたやすず、他藩に先がけて藩校をひらき、

その開校式に藩山を明石（今の兵庫県）から呼びよせてくれ

ました。藩学校の土台を作つたのは藩山だつたからです。

また光政公は、武士の子が通う藩校と合わせ、民のため

の学校もたて始めっていました。

それが閑谷学校です。閑谷学

校は光政公からまかされた

津田永忠の指揮で、長い年月

をかけて整えられました。

※津田永忠：旭川放水路を完成させた人。



蕃山にとつて、その後半生

ばくふ

が幕府にきびしく見はられ続

つづ

けたことは、たしかに不自由

ふじゆう

なことでした。しかし、池田

いけだ

光政公が教育の灯をともし

ひ

つづけようとしたことで、岡

山で学問や学校が大切に引き

つがれていたことは、何よ

りのさいわいでした。

学校があることで、武士の

のうみん

子も農民の子も学問がうけら
れる。これぞ蕃山のもとめる

しあわ
幸せであり、願いでした。



学問に生きた藩山の心のふ
るさと。

それは、岡山藩学校・閑谷学
校において、若い芽が生き生
きと育つた、この岡山であり
ました。

藩山先生の育てた山は、今
もゆたかに、葉をしげらせて
います。



